

「カルテット！人生のオペラハウス」★★★★

2013（平成25）年3月7日鑑賞

<GAGA試写室>

監督：ダスティン・ホフマン

脚本：ロナルド・ハーウッド

製作：フィノラ・ドワイヤー、スチュワート・マッキノン

ジーン・ホートン（元ソプラノ歌手）／マギー・スミス

レジナルド・レジー・パジェット（元テノール歌手）／トム・コートネイ

ウィルフレッド・ウィルフ・ポンド（元バリトン歌手）／ビリー・コノリー

セシリー・シシー・ロブソン（元メゾソプラノ歌手）／ポーリーン・コリンズ

セドリック・リビングストン／マイケル・ガンボン

サイモン／ルーク・ニューベリー

ルーシー・コーガン先生（ピーチャム・ハウスの責任者）／シェリダン・スミス

アン・ラングラー／ギネス・ジョーンズ

ボビー・スワンソン／アンドリュー・サックス

2012年・イギリス映画・99分

配給／ギャガ

<イギリスには、こんな老人ホームが！>

「老人ホーム」を舞台にした映画の名作は、全米450万部のベストセラー純愛小説を映画化した『きみに読む物語』（04年）（『シネマルーム7』112頁参照）等たくさんある。邦画でも、4人の70歳超老人軍団、今風に言えば、石原慎太郎前東京都知事をしのぐ「暴走老人」を主人公にした『死に花』（04年）はメチャ面白い映画だった（『シネマルーム4』338頁参照）。老人ホームというと何となく暗く寂しいイメージがあるが、ダスティン・ホフマンが初監督した本作の舞台となる老人ホームは、引退した音楽家たちだけが入居しているものらしいから、さぞや高級。そう思っていると、美しい風景が広がる英国の田園地方にドーンと構えられている巨大な老人ホーム「ピーチャム・ハウス」の内情は火の車らしい。

映画は冒頭から「ピーチャム・ハウス」で暮らしている多くの引退した音楽家の「生態」を見せてくれるが、よほどのオペラ通、音楽通でなければ、彼らの名前と顔はわからないだろう。今、ヴェルディ生誕200周年を祝うコンサートに向けてハツパをかけているのはセドリック・リビングストン（マイケル・ガンボン）だが、スター・ソリストの一人が出演辞退したこともあって、チケットの売り上げは激減。コンサートを成功させ資金を調達できなければ、ホームの存続自体が危ういらしいから、さまざまなタイプの老人たちをお守りしている（？）ホームの責任者たるルーシー・コーガン先生（シェリダン・スミス）も大変だ。しかし、日本人の私には、引退した音楽家たちを収容するこんな立派な老人ホームがイギリスにあることにビックリ！

<ホントは音楽的素養が不可欠だが・・・>

本作の中で数回歌われるオペラ『椿姫』の『乾杯の歌』なら誰でも知っているが、本作のタイトルになっている「カルテット」すなわち「四重唱」とは、2013年に生誕200年を迎えるヴェルディ中期の傑作オペラ『リゴレット』の第3幕で歌われる四重唱『美しい恋の乙女よ』のことを指すらしい。しかし、そう言われて「ああなるほど、あの曲か」とわかる日本人はあまりいないのでは？

プレスシートにあるサウンド&ビジュアル・ライター前島秀国氏の「真実を奏でる、本物の音楽家たち」には、「女たらしの公爵と、公爵に言い寄られるマツダレーナ、公爵に裏切られ捨てられたジルダと、ジルダのために復讐を誓う父リゴレットの4人が、それぞれの胸の内を歌い上げるこの場面は、オペラ史上最も美しい四重唱として知られている」と書かれているように、ホントは本作を鑑賞するについては、この程度の音楽的素養が不可欠だ。現在ヴィクトル・ユゴーの原作をミュージカル映画にした『レ・ミゼラブル』（12年）が大ヒットシファンテーヌ役を演じたアン・ハサウェイがアカデミー賞助演女優賞を受賞したが、何とこの『リゴレット』の原作者も文豪ヴィクトル・ユゴーだ。そして、このコラムによれば「1857年のパリ初演を観劇した文豪ヴィクトル・ユゴーは、『もしも私の戯曲の中で、4人の役者に同時に台詞を言わせ、しかも観客に台詞の意味と感情を伝えることが出来るなら、オペラと同じ効果が得られるのに』と、ヴェルディの作曲を賞賛した」らしい。

本作でこの『リゴレット』を歌うことになる4人の主人公は、①かつてオペラの名プリマドンナとして活躍したジーン・ホートンを演じる、ソプラノのマギー・スミス、②どうやら認知症が始まっているらしく、最近物忘れが目立つセシリー・シシー・ロブソンを演じる、メゾソプラノのポーリーン・コリンズ、③近隣の学生たちに音楽を教えることを生き甲斐にしている、物静かなレジナルド・レジー・パジェットを演じる、テノールのトム・コートネイ、そして④70歳を超えた今でも孫ほど年の違う女性スタッフを口説くことが日課のウィルフレッド・ウィルフ・ポンドを演じる、バリトンのビリー・コノリーの4人。『死に花』に登場した4人の「暴走老人」と同じく、『リゴレット』を歌う4人の老人も平均年齢が70歳超だが、さて音楽的素養の高い彼ら4人の生きざまとは？

<ストーリーの軸はジーンの説得だが・・・>

1990年代後半の日本では結婚したての男女が新婚旅行を機に離婚してしまうことを指す「成田離婚」という言葉が流行ったが、かつて結婚していたレジナルドとジーンの間はわずか9時間だけだったらしい。しかも、ストーリー展開中で明らかになるのは、離婚の原因はジーンの不貞だったというからレジナルドが傷ついたのは当然。本作前半は「ピーチャム・ハウス」に入り、それぞれの老後を過ごしているジーン以外の3人の姿が描かれるが、もともと個性的な3人だけにその生き方は年老いたことの悲しみは伴っているものの、それぞれ楽しそう。また、互いの距離感も近すぎず、遠すぎずで、ちょうどいい感じ。ところが、今度の新入居者があのジーンだということがわかると、当然レジナルドとジーンの間にはさまざまな確執が・・・。

もっとも、本作はレジナルドとジーンの「ドロドロ劇」を描く映画ではないから、ダスティン・ホフマン監督はその点の確執はサラリと解決させ、ラストに訪れるクライマックスを4大旧スターによる史上最高齢の『カルテット』の復活をもっていく。そのため、後半からのストーリー展開の軸はレジナルド、ウィルフレッド、セシリーの3人によるジーンの説得になる。過去の数々の栄光を持つジーンがある時期から歌うことをやめたのは、自分の衰えを自覚したため。オペラの名プリマドンナとして活躍したジーンにとっては、人前で衰えた歌声を聴かせることは何よりの屈辱と思えたわけだ。昨年大晦日の紅白歌合戦には16年ぶりに再結成した元祖ガールズバンド「プリプリ」こと「プリンセス プリンセス」が登場し、パブル全盛時代である1989年の名曲『Diamonds（ダイヤモンド）』を歌ったが、その歌声が往年のレベルより落ちていたのは明らかだった。レジナルド、ウィルフレッド、セシリーの3人はわざわざルーシー・コーガン先生から外食の許可をとって、ジーンをレストランに連れ出し、『リゴレット』を再度4人で歌うことを承諾させようとしたが、さてそれに対するジーンの反応は？

<あなたは何曲、また何人知ってる？>

ミュージカル映画『レ・ミゼラブル』のアン・ハサウェイをはじめ、ヒュー・ジャックマンやラッセル・クロウの熱唱には驚いたが、本作の主人公となる男2人女2人の『カルテット』を演ずるのは、オペラ歌手ではなく俳優だから、ダスティン・ホフマン監督は本作クライマックスにおける『リゴレット』を彼らにどう歌わせるの？そんな興味を持ちながら本作中盤を観ていると、ピーチャム・ハウス内で、こっちは楽器、あっちはコーラスとそれぞれ楽しんでいる老人たちはそれぞれすばらしい。それもそのはず、これらの老人たちは、キャスティングにこだわったダスティン・ホフマン監督がホンモノのオペラ歌手やピアニスト、トランペット奏者などを集めてきたのだから。私も1974年の弁護士登録から40周年を迎え、年齢も64歳になったが、本作に登場してくる老人たちはすべて70歳以上。しかし、そのすべてが一流の音楽家だから、その歌や演奏が今でもすばらしいのは当然だ。

ヴェルディの生誕200周年を祝うピーチャム・ハウス内のコンサートの前座（？）として登場してくる、これら「かつての一流音楽家」たちの歌声や演奏はそれだけで十分楽しめるものになっている。しかして、あなたはそのうち何曲、また何人知ってる？そして、遂にクライマックスの『リゴレット』のカルテットになるのだが、さてその歌声は・・・？それは、ダスティン・ホフマン監督の演出の妙と共に、じっくりとあなた自身の目で・・・。

2013（平

成25）年3月9日記